様式第９号

学位審査結果報告書

学位申請者氏名　　岸　岳宏

学位論文題目　小児における口唇閉鎖力と齲蝕の罹患ならびに口唇閉鎖習慣に関連する臨床研究　―正常咬合児と上顎前突児の比較―

審査委員（主査）　川元　龍夫　印

（副査）　木尾　哲朗　印

（副査）　笹栗　正明　印

学位審査結果の要旨

口腔周囲の軟組織の客観的な評価方法については一般的な手法として普及している評価方法は確立されていない。本研究は、客観的評価の確立や臨床病態把握への応用を目的として、正常咬合児と上顎前突児の口唇閉鎖力について多方位的に測定を行った。あわせて舌圧にも着目し比較検討を行っている。また、齲蝕の罹患状況とアンケート調査による患児の日常的な口唇閉鎖習慣状況についても評価を行ったものである。

調査の対象は九州歯科大学付属病院を受診した8歳から11歳までの小児期の患者から正常咬合者15名、上顎前突者15名とした。

多方位口唇閉鎖測定装置の結果から、正常咬合児の方が総合的な口唇閉鎖力が上顎前突児に比較して有意に大きかった。両群間に多方位的な口唇閉鎖力の有意な差は認めなかった。舌圧の測定からも両群間に有意な差は認めなかった。舌圧と口唇閉鎖総合力の相関についても相関関係を認めなかった。齲蝕の罹患状況については正常咬合児と上顎前突児に有意差を認めなかった。総合口唇閉鎖力と齲蝕の罹患状況の相関関係は正常咬合児が相関関係を認めなかったのに対して、上顎前突児では負の相関関係が認められた。質問紙調査による口唇閉鎖習慣の評価では、上顎前突児は日常的に口が開きやすいことが分かり、アレルギー体質と上顎前突の関連は認めなかった。

以上の結果から、上顎前突児の口唇閉鎖力は上口唇と下口唇の多方位的な口唇閉鎖力の不釣合いよりも、口唇全体の総合的な口唇閉鎖力の脆弱さにより関連していることが示唆された。また、上顎前突児は口唇閉鎖力の脆弱さが齲蝕の罹患原因の一つになっていることが示唆された。さらに質問紙調査では上顎前突児が必ずしも鼻閉による口唇閉鎖不全を伴わない事が示唆された。

本研究は正常咬合児と上顎前突児の口唇閉鎖力について多方位的に測定を行うとともに舌圧にも着目し両群間で比較検討を行った。また、齲蝕の罹患状況とアンケート調査による患児の日常的な口唇閉鎖習慣状況についても評価を行っており、非常に有意義な論文である。公開審査における質疑応答にも何ら問題は認められなかったことから、本審査委員会は学位論文として価値あるものと判断した。